
明けの明星

九木れかにふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明けの明星

【Nコード】

N06620

【作者名】

九木れかにふ

【あらすじ】

少年、太陽。少女、雪。祈子に香子、大泥棒の保助。犬の中納言。おかしく生きる彼らが混じって、また広がって、繋がる。ちっちゃくて少しの、ものがたり。

短編四篇構成のワールドシェア系物語です。話は全て、何処かで繋がっています。出来得る限りの、僕の見る世界。ほんの少しでも届けば幸いです。

雪の妖精と向日葵の冬（前書き）

第一篇です。ここから皆が始まります。

雪の妖精と向日葵の冬

Snow

雪が降っているみたいです。私はお花が大好きです。

Sun

少し眠くて、俺は小さく欠伸を漏らす。でも、寝てしまっわけにはいかない。俺は冬が大嫌いだ。

Player

寒くてかなわない。まあ、これが季節なんだろうけど。ありゃ、煙草切れてんじゃん。

Scent

今日も素敵な、木々の香り。空は暗く淀んでいるけど、私はさっぱり上機嫌です。

Hound

雪は冷たい。でも僕は好きだ。ストーブはあったかい。だから僕は好きだ。

Thief

手にぴったりと張り付く手袋を着けて、精巧な仮面を被る。どうやら、外は真っ白だ。

Teller

向日葵は夏の花である。そんなことは日本人なら誰でも知っているような至極当然かつ自然なことで、今更そんな当たり前の事柄を語られたところで、「だから?」と言われるに違いない。

そう、確かに違いないのだ。だが、ここでもう一度その事実を確認しておくことにしよう。

「向日葵は夏の花だ。夏に咲いて、秋には散るよ。当然だろ」

ニコチン切れで多少苛ついた声で、背の高い、髪を一つに束ねた女性は吐き捨てた。目の前に佇む椅子を蹴飛ばしそんな剣幕で、彼女にくだらない質問をなげかけた人影を睨み付ける。睨みつけられた女性、香子は、そんな剣幕には少しも怯むことなく、あらあら、と頬に手を当てて、言う。

「駄目よ祈子。そんなお下品な言葉を使っちゃ」

「うるせえ、口答えしてつとクビにすんぞ」

「あらあら」

「……ちっ」

どうにも落ち着きはらった香子に毒気を抜かれ、祈子は香子と自分との間にある先程の椅子を、蹴飛ばす代わりにがたりとわざと大きく音を立てて座った。祈子にとって、本来なら雇用者被雇用者の関係であるところの香子は、どうにも天敵だった。祈子も馬鹿ではない。むしろ、彼女は多少一般と呼ばれるそれとは違う人生を送ってきたためか、他の同年代より遙かに達観した人物であるのだが、それでもなお、常日頃から片時も笑みを崩さない香子は、何を考えているのか全く分からない、祈子の苦手とする人種だった。ちつと、祈子は今度は音にせず、舌打ちをする。立場上、香子をクビにするのは簡単だが、しかし、祈子とて経営者だ。個人的な思想に基づいた軽率な行動がどういった結末を導くのかぐらい、理解している。それより、どうしようもないことに、彼女は苦手としているはずの香子という人間を、嫌いにはなれなかった。そうでなければ今日までおよそ五年間、同じ職場で顔を合わせることなど、出来るはずがないのだ。

祈子は一度だけおだやかな微笑みを湛える香子の顔を見ると、直ぐにその奥、ガラス張りの壁の向こうへ、目をやった。薄いガラスを挟んだその先には、室内にも関わらず無数の木々が、草花が、思

い思いの形をなして鎮座している。当然だ。ここは、植物園なのだから。

*

「綺麗な場所ですね。私はここが好きです」

上方から声が降ってきて、太陽は目線を上げた。床につきそうなほどの長さを持つ、美しい銀髪の少女が立っていた。蒼く透き通った瞳と自分の黒いそれが重なって、彼は咄嗟に顔を背ける。そんな自分が酷く矮小に思えて、太陽は心中自らを罵った。ようやく少女と目を合わせ、地面に座り込んだそのままの姿勢で、応える。

「そうだな」

「はい。ところであなたは、どなたですか？」

質問の順番が逆だろうと、彼は思ったが、しかし口には出さず、答える。

「太陽。ここは『番人』だ」

背一角には彼の後ろに一本だけ咲いている向日葵の番人なのだが、やはりそれは口にはしなかった。

「太陽さんですか。素敵滅法なお名前です。私はお日様も大好きですから」

「そうかよ」

恐いくらいに無邪気に笑う少女から再度目を逸らし、太陽は素っ気なく応じる。変な奴だな、と思った。

「お前こそ、誰だよ」

社交辞令だと内心呟きつつ、彼はまた少女に向き合った。何が嬉しいのか、少女は先ほどよりもさらに喜色満面の笑みを浮かべる。

「はいっ、私は雪の妖精さんです。雪、と読んでくださってかまいませんっ」

「そうかよ」

またも目を逸らして、太陽は息を吐く。矮小だ、卑小だと、何度も卑下する。彼は自分が嫌いだった。今すぐにも自らの喉を掻っ捌

きたい衝動に駆られて、太陽は慌てて自分の後方、高く天井を向く向日葵の方を見た。はち切れそうな気持ちを落ち着かせて、彼はようやく、口の端を上げて笑った。自嘲に見えて、それも嫌だった。「美しい向日葵ですね」

後方から声を掛けられ、太陽は頷く。この向日葵は、本当に美しい。こんなにも小さい自分の存在すら、認めてくれるようだ。だから彼は、強く言った。

「当然だな」

その答えが嬉しくて、雪はまた、笑った。

「悲しいですね」

*

わう、と一声、犬の鳴くのが聴こえて、祈子は足元を見た。どこか黄色がかかった赤褐色の柴犬が、ゆったりと尻尾を振りつつ口に啜えた封筒を差し出している。ああ、と彼女は柴犬の啜えるそれに手を伸ばす。

「ご苦労さん、中納言」

言って、中納言と呼ばれたその雄犬が郵便物を話すのを確かめてから、彼の頭を無造作に撫で回した。中納言は嫌がる素振りも見せず悠然と、しばし撫でられてから、祈子の足元を離れてテーブルを挟んだ向かい側に位置する香子の元へと移動した。香子は少し笑って、中納言の背中あたりに手を置いた。

「相変わらず、お利口ですね、黄門様」

「何度も言うけどな香子。そいつは中納言だ。黄門様じゃねえ」

「あら？いいのよ祈子。光圀様は中納言だったんですもの。同じ役職なら、ご高名な方の名を付けてもらった方がいいですよねえ、黄門様」

話しかけられた中納言は、特にどちらにつくわけでもなく黙ってその場にしゃがみ込む。

人間の会話に混ざるつもりは、どうやら無い様だった。

「興味無いってよ」

祈子は軽く言うと、受け取った封筒を差し出し人も確かめずに破り開ける。香子が「はしたないですよ」とか言っているが、無視した。質素な便箋に並べたてられた文面を見て、首を傾げる。

「なんだこりゃ、悪戯か？」

文面には、特に細工を施しているわけでもない不格好な字で、こう書いてあった。

『前略』

今夜零時、当植物園の向日葵を頂く故、用心なされるようお頼み申す所存。

大泥棒 保助』

犯行予告である。今時これは無いだろうと思いつつも、少し興味がわいて、香子にも見せてみる。

「あらあら、これは困りましたね」

「そうか？ 筆跡と名前晒すような間抜けだろ？ 悪戯か何かだつて」

「いえ、この『ほすけ』さん、よっぽど自信があるのかも知れないわ」

「ふうん。まあでも、面白え。太陽に伝えてやろうか。あのガキ、あれにえらくご執心だろ」

「そうね。でも、お客様がいらっしやったら困るから、祈子はここにいて。私が伝えてくるわ」

「やだね。煙草も切れてっし、私が行ってくるよ。お前が受け付けやってる」

「はいはい」

席を立つ口実を得た祈子は、したり顔で部屋を出る。香子は「まったく、もう」とでも言いたげな表情を浮かべてはいたが、言わず、扉の向こうに消えていく上司兼友人に、ただ一言だけ、声をかけた。「体に毒よ、祈子」
「うるせえよ」

*

保助は最初、柴犬が自分を追いかけてくるのを見た時、正体がばれたのではと焦っていた。今の自分は、子の休日に暇を持て余して植物園に足を運んだ成人男性にしか見えないはずであるのだが、しかし、動物には人に無い感覚があるという。他の客に怪しまれぬよう、平静のまま柴犬の頭を撫で、少ししてから離れる。今夜の仕事の下見に來ただけなの

だ、そんなに焦る必要は無い。相手は犬だぞと、自分に語りかける。案の定、犬は別段吠えたりするわけでもなく、静かに彼のもとを去って行った。ようやく一息つき、彼は目当ての花を探して園内を歩き回る。まさに目玉商品らしく、『枯れない向日葵』は、園内の丁度中心に位置する座標に、どうどうと咲いていた。その花の中腹あたりまでを囲う柵に少年が寄りかかっているのを見つけ、保助はその中学生にも高校生にも見える少年のもとに行き、尋ねる。

「なあ君。これがあの『枯れない向日葵』かい？」

「そうだよ。この花は、他のどれより美しい」

うつとりとした風に言う少年に礼を言っつて、保助はその場を離れることにした。下見はこれで十分だろう。後は、予告状をポストに入れていくだけだ。

「綺麗な場所ですね。私はここが好きです」

「そうだな」

背後から、歳ほどの少年と少女の話し声が聴こえてきた。

*

郵便受けのドアを爪を引つ掛けて開き、中納言は中の封筒を啜えて主人である祈子の元へ向かった。匂いでわかるが、これを投函したのは先刻の青年だろうと思う。見たところ、彼は泥棒を生業としている人種の様だった。この封筒の中身は予告状か何かだなど得心する。

中納言は人間が好きだった。人は皆一様に、利益を目指し、己の信念に向かって生きている。どのような主観であれど、中納言は人を好いていた。

祈子のいる部屋のドアを跳躍して開け、入る。彼女は、入口に背を向ける形で椅子に座っていた。寄って行って封筒を渡すと、彼女は「ご苦労さん、中納言」と言つて中納言の頭をくしゃくしゃに撫でた。少し経つてから、タイミングをみて向かい側に座る香子の元へ歩いた。彼女は微笑み、背にポンと手を置いてくる。

「相変わらず、お利口ですね、黄門様」

香子がさういうと、祈子が即座に中納言の呼び名を訂正した。役職だとか高名だとか言っているのを耳にしつつ、しゃがみ込む。室内は暖かい。少し寝ていようかなと思ひ、彼はそのまま目を閉じた。

*

雪のちらつく外気の中、保助は今しがた出てきたばかりの植物園の周囲を歩き回つてい

た。勿論、今夜予定している仕事の経路確認のためだ。予告状を出した以上、真偽の疑いはあるだろうが警備員を配置する可能性はある。可能性がパーセントでもあるのであれば、しっかりと予定を立てて事に臨むのは、本職として当然のことだった。

ドーム状の建物を一通り回つて、侵入経路を確定する。これで前座は終了。後は、その時を待つのみだ。「人事を尽くして、天命を待つ」泥棒の身で使う諺では無いとは思つたが、保助は呟いて、植物園から離れることにした。しかし、

「あら？　どうかなされましたか？」

振り返って帰路に就いた保助に、おだやかな女性の声が届いた。女性性は彼の正面に悠然と立っていて、底の見えない微笑を、顔に浮かべていた。どうにもその姿が超然とした女神の様に見えて、彼はたじろいだ。が、すぐに平静を取り戻し、応じる。

「いえ、実は、道に迷ってしまつて。この建物の周りを一周してしまいました。はは、どうもこの辺は不得手でして」

「あらあら、そうでしたか。そういうわけでしたら、ご案内しますよ。どちらからいらつしやつたのですか？」

「はあ、 町です」

「でしたら、あちらの道をまつすぐですよ。どうぞ、お氣をつけて」「ええ、どうも、ありがとうございます」

保助は礼を言い、彼女の隣を抜けて説明された方向へ歩いた。ほつと一息ついた矢先、また、声をかけられる。

「あの、あなたとはまたお会いしそうな気がしますから、是非、お名前を伺いたいのですが」

「え？ ああ、勿論。自分は、大川と言います。それでは、失礼」「はい」

保助が路地を曲がるまで、女性はやはり悠然と、彼の背を見送っていた。

*

「おうガキ。そいつ誰だ？ 彼女？」

「違いよ」

何の前触れもなくひよつこりと顔を出した祈子に、太陽は目線をずらしつつ答える。彼が毎日のように通い詰めているこの植物園のコーナーである祈子は、鼻屑にしているいつもの銘柄の煙草をふかしている。植物園で煙草を吸うなよと太陽は常々思うが、言つたところでこの女は聞き流すに違いないので、黙っておく。なぜ植物園を開いたのか、甚だ疑問だつた。

「何だ違えのか。んじゃ何？ 誰？」

祈子の無遠慮な視線を気にもかけず、雪が答える。

「雪と言います。花が見たくて」

「ふうん」

答えを聞いて、それきり興味を失ったかのように、祈子はまた太陽に向き直った。左手で煙草を持ち、白い煙を吐きながら空いた右手でズボンの後ろポケットかた封筒を取り出し、彼に投げ渡す。

「なんだよ」

「興味深いこと書いてっから、読んでみ」

にんまりと笑う祈子を訝しげに見ながらも、太陽は受け取った封筒の中身を開いた。さっと目を通し、瞬間、一瞬前とはまるで別人のように、憤怒の形相を浮かべた。手の中の便箋を握りつぶしつつ、叫ぶ。

「ふざけやがって、どこのどいつだ！！」

そんな彼を見て「おうおう」とか言い、祈子は依然として笑みを湛えながら、嘯いた。

「な、大変だろ？ どうする？ このままじゃ向日葵、盗まれちゃう」

「させるかっ！！」

「だよな。そこでだ、お前、警備役やるよな？ ああ、夜中になるから親にはばれんなよ」

「当然だろ！！」

いきりたつ太陽の反応を見て満足したのか、彼女は「んじゃ頼むわ」などと言いながら片手をヒラヒラと振って、事務所へと戻って行った。

しばし経って太陽が落ち着いた頃に、雪はようやく口を開いた。

「困りましたね。こんなに綺麗なのに」

「奪わせやしねえよ」

多少かみ合わない会話を続けつつ、彼女は、こんなことを言う。

「勿論ですよ。ですから」

また、満面の笑みを浮かべて。

「私たちが、盗んでしましましょう」

眩しいほどのその笑みから、しかし太陽は、目を背けることに失敗した。

*

奇怪な運命は、いくつもの偶然によってさらに加速する。終わりは近く、まだ遠い。

Snow

ようやく使命を果たす時が来たようです。やっぱり、雪は綺麗です。

Sun

冷水を叩きつけるようにして顔を洗う。欠伸は噛み殺す。さて、行こう。

Player

どうにも笑いがこみあげる。楽しくて仕方ねえ。お手並み拝見、てか？

Scent

呑み込まれそうな夜が広がって。きっと素敵に刺激的です。

Hound

外の世界はわくわくする。こっちの世界はどきどきする。

Thief

さあ、そろそろ働こう。

T e l l e r

そして、幕が上がる。

*

時刻は実に二十三時五十分。予告通りなら、後十分もすれば大泥棒がここに侵入するだろう。祈子は今日何本目になるかわからない煙草を燻らせて、暗い事務所に白い煙を吐き出した。夜間に動くのは久々だった。彼女はくく、と笑うと、手元の懐中時計の電池を確かめる。カチツと音がして、オレンジがかった光が目の前を照らし出した。昼間と同じ座席でコーヒーを啜る香子の姿が明確になる。祈子はすぐに明かりを消して、仕事仲間に声をかけた。

「来ると思うか？ 大泥棒」

「ええ。いらっしやるわ、きつと」

余裕のある声音で、香子は答えた。祈子はもう一度小さく笑う。どうにも緊張感に欠けるが、それはそれで面白いと思っていた。彼女にとっては、これもゲーム感覚にすぎなかった。袖に隠した仕込みナイフを手に馴染ませつつ、祈子はその時を待つ。

*

常時暖かく保たれた植物園の園内で、太陽は息を吐いた。眠気が無いと言えは嘘になるが、そんなことを気にしている場合ではない。園芸用のスコップで土を掘り返しながら、彼は隣で同じように黙々と作業する少女に声をかけた。

「なあ、これ本当に盗むのかよ」

今の今まで幾度となく問い続けた質問を、太陽はまた口にする。一瞬も間を開けず、この計画の首謀者たる少女、雪は頷いた。

「勿論です」

「でもさ、向日葵はでかいぜ。どうやってどこに運ぶんだよ」

「根まで掘り返して裏口を抜けてあなたのお家まで運びます。植木

鉢は、準備していますよね？」

「まあ、一応な」

彼女の言いつけどおり、太陽は一度自宅に帰った後、小学生の頃にチューリップを育てていた植木鉢に新しく土を入れ、下準備をしていた。突発的な犯行にしては、行きとどいていると言えるだろう。

右手首に捲いた腕時計に目をやると、いつの間にか時刻は二十三世をまわっていた。急がねば、零時になってしまう。この経営者たる祈子と管理人たる香子も当然事務所で待機しているだろうから見回りに来られたらアウト。自然と太陽の掘削作業はスピードを増していく。焦ってはいけないと思いつつも、彼の手は止まることなく動き続ける。

*

従業員たった二名にしてはそれなりの広大さを有する園内を、中納言は歩き回っていた。季節ごとに、日ごとに、数瞬ごとに違った面でもって中納言を迎えてくれるところが、彼はとても好きだった。生まれてこの方気付けば四年弱、自分はずっとこの植物園で過ごしてきた。そして思えば、彼が祈子に拾われて以来、あの向日葵は花びらの一枚から種子の一粒にいたるまで、一つたりとも変わらぬ姿でこの植物園の中心に鎮座していた。否、変わらぬ、ではなく、変わるることなど、絶対に無く、だ。

中納言は心なし少し目を細め、向日葵と、その傍らで作業を続ける二人の姿を見た。な

るほど、と彼は得心して、その場を離れる。彼は花が好きだった。彼は植物も好きだった。彼は人が好きだった。彼は生命を愛していた。彼は、世界のすべてを愛していた。

ただ彼は、美しい、一本の向日葵が大嫌いだった。

*

白く暗い夜の中を、怪しげな仮面を着けた保助は歩っていた。夕

ーゲットのある植物園の窓を丸く切り取って解錠し、侵入する。目的の用具倉庫に向かいつつ、彼は今回の狙いである一輪の花について、考える。そもそも、ただの泥棒たる保助が花なんぞをほしがる理由は無かった。売るにしても、特異性のある商品であるがため、犯行がばれてお縄につくだろう。ではなぜそんな意味も価値も無いモノを盗みに来たのか。そんなの、理由があるに決まっている。

保助は、真つ白な病室で自分に笑顔を向ける女性の姿を思い浮かべた。全くの他人だった彼女の為に、保助は動いている。全く滑稽な話だな、と、彼は自嘲気味に笑った。盗みを生業としている自分が、まさか人助けまがいのことをするとは、夢にも思わなかった。

『用具倉庫』と書かれたプレートのかかるドアノブに手をかけてまわしてみる。当然、固く閉ざされたドアは開くことはなかった。わかりきっていたことなので別段取り乱すこともなく、保助は懐から加工した針金を取り出すと、ドアノブの上部、鍵穴にそれを挿しこむ。手際良く鍵を開け、保助は特別感慨も持たずにドアを開く。仕事は、正確かつ迅速に、だ。

が、しかし。ダンツと大きな音がして、咄嗟に身を退いた彼が今しがたいた場所を、鋭いハイキックが通り抜けた。想定外の事態に焦りを隠せない保助に、ちっと、気のない舌打ちが聞こえる。直後に部屋の照明が点いて、急襲者の全容が彼の目に映された。

*

用具室の鍵が外側から開けられる音がして、祈子が右足を宙に浮かす。ドアが開けられたその瞬間、鋭く踏み込んで重心を横に振った。彼女の左足が空を薙ぎ、どうやらかわされたものと知る。小さく舌打ちすると同時に、待機していた香子が電灯を点けた。怪しげな仮面が見えて、祈子は笑う。なかなか出来そうな奴じゃんか。

一歩で間合いを詰め、勢いを殺さずに回し蹴りを繰り出す。仮面の男、保助は身を捻ってそれを避け、逃走は無理と判断したか、それとも元より逃げるつもりも無かったのか、即座に拳を打ち込んで

きた。余裕をもってそれをあしらい、祈子は少々がっかりした風な口調で言葉を紡ぐ。

「んだよ。そんなもんか？ 大泥棒さんっ！」

語尾とともに渾身の右足を打ち込む。が、保助は、ギリギリのタイミングでその蹴りをいなし、祈子の足を捕まえた。投げ飛ばすつもりか、保助は彼女の足を両腕で抱え込むようにして、そして。

「あまいなっ」

遠心力を目一杯に利用した祈子のとび蹴りを側頭部にくらい、あえなく床に叩き伏せられた。

*

「動くなよ。ナイフ刺さるぞ」

起き上がるうとした矢先に冷たく制され、保助は抵抗を諦め仰向けに寝転んだ。畜生、と思いつつも、ふとした疑念を持って問いかける。

「なんで、ここにくるとわかった。予告状には向日葵を頂くと書いたはずだが。あれは園内中央にあったはずだろ」

保助の問いに、彼の上にナイフを掲げたままの姿勢で、祈子が答えた。

「簡単だよ。お前がここを偵察してた時に、大体の目星つけてたんだ。まあ、決め手は香子だけだな」

香子、と呼ばれた女性の方に目を向け、保助ははっとする。帰りに声をかけてきた女だと、直ぐに分かった。まさかばれているとは思わなかった。保助は悔恨というより、自らの未熟さに自嘲の念を持つ。おとなしく警察に突き出される気になってきた保助は、ふっと小さく笑みをこぼす。だが、続く祈子の言葉は、彼の予想をはるかに超えたものだった。

「さ、欲しいもん持ってとつと行けよ。私らも警察苦手だし、現金と預金通帳以外なら何持ってかれても大したことねえ」

「な、何言ってるんだ、あんたは？」

「ああ？ 良いつつつたら良いんだよ。それともなんだ？ 情けかけられるくらいなら死にてえって口か？」

「い、いや、そういうわけでは……」

「ではお早めに選んでお引き取りください。私たちにも事情がありますので」

「ああ、わかった……」

どこか釈然としないながらも、保助は予定していた鈴蘭の造花を一束持ち、植物園を後にした。

*

「お怪我は？ 祈子」

「あるわけねえよ。まあしかし、結構良い筋してる奴だったな」

「そうですねえ」

話しつつ、祈子は大泥棒の去って行った方に目をやって、大きく欠伸した。香子がまた「はしたないですよ」と言ってくるが、無視する。

まだ、一仕事残っている。

*

その向日葵だけは、太陽をいつも変らぬ姿で迎えてくれた。家ではそうはいかなかった。母親は彼が幼少の内に自殺し、父親は毎日酔って帰っては日々違った態度で太陽に接してくる。言いようのない暴力を受けることもあれば、普段の強気が見る影もないほどになりを潜め、永遠と「すまない」と繰り返すこともある。どんなパターンであれ、太陽は父親を見る度に家を飛び出していた。

太陽は現在抱えている向日葵の花弁を眺めつつ、思う。この存在が無ければ、自分はどうの昔に死んでいただろう。生きる気力を無くし、死を考えてばかりいた彼の心を救ったのは、常に変わらぬ姿を見せつける、この花あつてのことだった。太陽は愛おしげに向日葵の茎を撫で、瞬間、とある事実気付いて立ち止まる。根元を持

つて付いて来ていた後方の雪が何事かと足を止め、彼の様子を窺ってくる。

「あのヤロウっ!!」

吠えるように叫び、太陽は手元の茎を叩き折って走り出した。

「どうしたんですかっ?」

背中に聴こえた雪の声は、無視した。

*

「なあガキ。お前がご執心のあれはな、モノなんだよ。『枯れない』なんていつてもな、大したことじゃねえんだよな。端から、枯れられえねんだからさ。まあなんだ。つまりな」

息を切らせて方で呼吸する太陽に淡々と、祈子は事実を述べる。

「あれ造花」

ただ、述べる。

「お前は作りものの、見せかけの生命に心の拠り所であることを求めてさ。結局、弱えんだよ。つか、わかってたんだろ? なあ」

太陽は答えず、

「だから、いい加減前見て歩けよヒヨっ子」

ただ、祈子に掴みかかる。胸ぐらをつかみ上げようと伸ばした右腕は、しかし祈子に簡単に払われる。

「今日は色んなことあったよな。泥棒さんが来たり、知らねえ女が来たり。丁度良い機会だぜ、お前」

真っ直ぐ突き出した左腕は、捕らえるべき対象から逸らされて空を切る。

「丁度良い機会なんだよ、自殺志願者」

充血した眼を見開いて、太陽の動きが止まる。

今にも人を殺しかねん形相で植物園に駆け込んできた太陽に、祈子は言い聞かせるように語っていた。唯一無二の、姉として。祈子と太陽は、母親の違う姉弟だった。祈子だけが、それを知っている。「もうわかつたろ? 変えられないものなんざ無えんだ。何かに縋

って生きるのもう止める。その脚は歩くためについてんだ。手前の力で立つたためにな」

言い終えて、祈子は太陽に背を向けた。継ぎ足す言葉も無く、ゆっくりと、歩を進める。

「わかっているんだよ、そんなこと」

呟くように太陽が言って、祈子は立ち止まった。黙って、次の台詞を待つ。

「わかっているけど、でも、どうすりゃいいんだよ、姉ちゃん」

泣きそうな声で言う太陽に、祈子は笑って、言うてやる。

「あの馬鹿親父を殴ればいいんだよ」

何だ知ってやがったか、と心中毒づきつつ。

「太陽」

*

弟の去って行った方を眺めつつ、どうにも今日は誰かを見送るところが多いなと、祈子は思った。

(まあでも、今度は私が送られる番かな)

心の中に呟くのと同時に、背後に足音が聴こえて彼女は笑む。香子で間違いないだろう。そして香子は今、祈子に狙いを澄ましているところだろう。振り向くと案の定、祈子の胸元へ一直線に、黒く底の見えない銃口が向けられていた。銃を構えるのは、やはり、良く見知った仕事仲間だ。そう、昔からの。

「涙ですか。らしくないですね？ 祈子」

言われて初めて頬を伝う水滴に気付き、祈子は苦笑しつつ「似合わねえか？」と囁く。

「似合いますよ、ええとても」

呟くように言う香子は、確かに本心からそう言っているようだった。

「昔から、今もまた、あなたは何でも似合います。美しいですよ」

「おおおう、そうかよ」

ふざけた風と言う祈子に、香子は少し顔を顰める。

「そういう飄々とした態度は、あまり似合ってません」

「ああ、わざとだしな」

言いつつ、祈子は袖口を振って仕込んでいたナイフを手に持った。

「お前に殺されるのは悪かねえが、でも、抵抗されないとは」

「ええ、勿論思ってます。抵抗してください」

「だよな」

遮るように言った香子の台詞に応え、祈子は地面を蹴った。

*

その夜、中納言がきいた銃声は、たつたの一発。

*

雪は、太陽が走り去った場所にそのまま立っていた。この寒気の中放置していたというのに、彼女は依然として穏やかな笑みで持つて太陽を迎えた。「ごめん、急に」と一言謝り、寒くないかと聞こうとして、止めた。寒いに決まっている、と思い直したわけでは無い。何故か、雪は全く寒くなんか無いんじゃないかと思えたのだ。それよりも、太陽は一つ、彼女に伝えなければならぬ事がある。きっとそれが雪がここにいる理由だと、太陽は感じていた。どうしてか、感じているのだった。

「もういいよ。俺は歩くことにしたから」

言った瞬間、雪の姿が一瞬だがブレたような気がした。やっぱりか、と思い、続ける。

「折角だけど、お出迎えは遠慮しておく」

こくりと、雪は小さく首肯した。

「はい。嬉しいです」

この笑みが彼女の本当の笑顔なんだろうなと、太陽は思った。今の自分にはまだ眩しいけど、でも、いつか。正面から向き合おうんだと、心に決めて。

「それでは、私は帰りますね」

「ああ。じゃあな、妖精さん」

「はい。さよならです、番人さん」

瞬きの間に、雪の姿は消えていた。無性に嬉しくなって、太陽は白い大地を踏みしめて走る。とりあえずは、あの男を殴ってからだ。笑うと、堪えていた欠伸が漏れた。

Snow

素敵に滅法に幸せです。きっと皆さんも幸せなのです。

Sun

欠伸混じりに、拳を振った。歩いて行く道が、見えた気がした。

Player

渴いた喉に、煙草は痛い。……禁煙、すっかなあ。

Scent

長い夜も、明ければ朝です。見上げれば、そこは空です。

Hound

蒼い空を愛そう。白い雪も愛そう。散歩は今日も楽しい。

Thief

人事を尽くせば、天命は下る。万事そろえば、上手くいく。

Teller

植物園の真ん中で、向日葵は一枚、花びらを落とす。

雪の妖精と向日葵の冬（後書き）

読了ありがとうございます。彼らの行く末を、もう少しだけ見守ってやってください。

大泥棒のティーカップ事件簿

*

大川 保助は泥棒だった。藍川 林檎は入院患者だった。たったそれだけの必然がどう重なり合ったのかはこの世の誰が知っていることでもないが、それでも、二人のホモサピエンスが出会い、惹かれ合った事実は、確かな事象として、存在していた。

彼らの出会いは、互いが互いのすべきことを成していた最中の、いわば小さな事故のようなモノで。何ら語る必要性の無いその出来事を、しかしここでは、語らうことにしておこう。

*

奇妙奇天烈な仮面を装着した大川 保助は、小脇に戦利品の封筒を抱えて逃走していた。別に誰かに追われているわけでもなく、厳密にいえば帰還しているだけなのだが、いやしかし油断はいけないと思い直し、静寂に包まれた病院の廊下を小走りで駆け抜けている。と、懐中電灯らしきオレンジがかった光が、前方に見えた。夜勤の警備員らしく、腰のホルダーには黒い鉄の塊が見える。拳銃だ。ぞつとしない感覚に襲われて、保助は素早く、かつ慎重に手近な病室のドアを開けた。全く音を立てずに動くことに成功し、内心秘かにガッツポーズを決める。さすがに泥棒稼業を始めて早六年。基本的な動作はマスターしている。

警備員の足音が遠ざかるのを待ってから、またドアに手をかける。思えばこの時、彼の経験はまだ、たったの六年だったのだ。

「ん……誰？ だろぼお？」

だからこそ、病室に誰がいる可能性を失念していたし、その誰か付き明かりに照らされて光る長く艶やかな黒髪を垂らす、病的なまでに白い肌の少女に声をかけられた時、馬鹿正直に答えてしまったのだ。

「はい、大泥棒の、大川 保助です」

この受け答えが原因で、知りあつて初めの数週間、保助は少女から「大泥棒の大川さん」と呼ばれることになるのだった。

*

他称病弱の薄幸少女こと藍川 林檎は、十六歳という若さにしては、奇妙奇天烈なまでに完成した価値観を持っていた。そもそも、少女と言うにはあまりに大人びた雰囲気を持っているし、それも病の所為なのだろうかと思うと、安直に褒めるのも憚られた。

だからというわけでは無いが、保助は彼女と話す時、進んでくれない話題を提供して

いた。

「犯人は現場に戻るとは言うけど、まさか泥棒が一仕事した場所に

通い詰めているとは、誰も思わないだろうな」

言いつつ、保助は病室の窓際、水の入っていない鉢に活けられた鈴蘭の造花に目をやった。この花にもとある物語が伴っているのだが、もうその話は、話せ話せとせつつく林檎に一通り語り終えている。

保助の視線を追って同じ場所で視線を止めると、林檎は自然と頬が緩むのを感じながら、話に乗る。

「ほんと、現場に戻ってくる犯人なんて、テレビの中だけだと思つてた。変なんだね保助さんは」

二度目にここで会つた時のことを思い出して、林檎は声を抑えつつ笑う。若干拗ねた風な表情になつた保助に向かって、彼女は意地悪げな口調で言った。

「『侘しい空間から、退屈そうな姫君を盗み出そうと思つてな』だつて。あはっ、今時そんなクサイ台詞、ドラマでも言わないよ？」

林檎の言葉に、うぐ、と保助は苦々しげに呻く。保助は何かと理由付けが苦手で、問い詰められると直ぐに気取つた言葉が出てきてしまう。最初の夜に両親から見放されていると語つた林檎を気にして再度訪れた時にも、その特性は発揮されてしまつていた。

「まあ、そんなこともあつたな」

いかにもきにしていない風を装つて言つてみるが、彼女がまた小さく吹き出したのを見る限りばれたのだろう。それ以上は何を言つても無駄だと考えて、保助は仏頂面で黙り込んだ。

「保助さん、それも、墓穴だよ」

くくく、と堪え切れない笑い声を漏らしつつ、林檎は小刻みに肩を揺らす。どうにも上手く対応できなかった保助は、黙つたまま顔を背けた。面白くなさそうに、咳く。

「いいのかそんなに笑つて。今日はそんなに良くないんだろう、体調」

「うん？ 大丈夫大丈夫。軽い風邪だし……つごほ、けほつ」
「ほら見ろ」

急に咳き込む林檎に呆れつつもベッド脇の冷蔵庫から水のペットボトルを渡してやる。胸元を押さえながらゆつくりと喉に流し込んで、林檎は息を吐いて寝転んだ。少し埃が舞つて、また小さく咳が出る。林檎は先天性の免疫不全症を患つており、その上人一倍症状が強く、幼少の頃からほとんどの時間を、病室で過ごしていた。保助ら一般人には大したことない風邪も、彼女にとってはこじらせれば命に関わる大病だ。そのため看病に疲れ切つた両親は彼女を捨て、もう十年もの間、林檎は一人で過ごしていた。入院費だけは今だ両親から払われ続け、その事実も彼女を苦しめている。捨てたクセに。

独学で勉学はこなしてきたが、友人と呼べる存在は、依然一人として存在しない。あえて挙げるなら、売店で働く女性だけだった。

保助がここに通い始めて三カ月経つが、林檎の口からそれを聞いた時、彼は酷く打ちのめされた。

「死を考えたことは。無いのか？」

以前、保助がそう尋ねた時、彼女は笑つて、ただ一言答えた。

「馬鹿だな。いつ死ぬか分かんないんだから、ずっと考えてるに決まってるよ」

ベッドに寝転ぶ林檎を無言で眺めていると、聞かせるつもりは無

かったのだろうか、小さなぼやきが、聴こえた。

「生きたいよ」

か細い姿がいつも以上に弱々しく見えて、同時に、今の呟きは「生存し（いき）たい」でなく「活動し（いき）たい」だったのだろうか
など思えた。俺もだ、と、保助は呟いた。

*

林檎が眠ってしまったのを見届けてから、保助は階段を二つ下がって一階の売店へ足を運んだ。さほど広く無い店内のレジで暇そうにしている女性を見つけ、声をかける。

「福田さん。よほど暇そうだな」

「何それ、嫌味ですか？ 大川さん」

保助の姿を確かめた女性が唇を尖らせる。彼女、福田 緑は林檎をよく気にかけている女性で、病室でかち会った保助の正体を初見で当ててしまったとんでもない人物でもある。業務用のエプロンの裾を伸ばしながら、緑は相も変わらず見透かしたかのように、言う。

「藍川ちゃん寝ちゃいました？」

「ああ、そうだが。でもあれは」

「狸寝入り、ね」

「……はあ」

保助の言葉を完全に横取りして、緑は微笑む。思わずため息を吐いた保助に、彼女は続けた。

「で、泣いているだろうから暫く福田さんとも話してよう。ってところですよね？」

「あなたという人は」

先の先まで言い当てられて、保助はもう一つため息を落とした。もはや読心術じゃなかるうかと疑ってしまうのも毎度のことである。

「ふふつ。本当、分かりやすいですね大川さんは。はい、私今日はシフト終わりなんで、行きましようか。そろそろ治まるところでし
よう？ 藍川ちゃんも」

「だな」

エプロンを外す緑に余計な台詞は言わず、保助は彼女の代わりにレジに入った店員にコーヒーを三本要求した。

*

病室に入るなり「ありがと」と小さな声が聞こえ、保助は危うくコーヒーの缶を落としかけた。気を使ったのがバレたかと焦る。林檎は今までの生活上、同情などといった感情を嫌っていた。機嫌を損ねた林檎は扱いが非常に面倒であることを思い出して、緑と二人ですわ一大事と内心構えていたが、林檎が黙って右手を出して来たことからなるほどコーヒーのことかと肩を撫でおろす。

「あと、一人にしてくれただけのことね」

「っ……。気付いていたか」

「それはもう。ん、コーヒーちょうだい」

容赦ない言葉に苦笑しつつ、出された手に缶コーヒーを渡す。後ろで忍んでない忍び笑いを漏らす緑にも、こちらは仏頂面を向けつつ渡す。余計に笑われて、保助はまたかと心中頂垂れた。

「うわっ、苦っ。保助さん、これブラックだよ」

「ん？ ああ、悪い。忘れてた」

林檎にまた文句を言われ、さらに肩をすくめる。どうにも分が悪い日ようだ。

「ふふ、藍川ちゃんはまだ子どもなんだから、気をつけないと。保助さん」

と、今の今まで黙り続けていた緑が、急に窘めるように言ってきた。ん？ と保助は一瞬小さい違和感を感じて、直後の林檎の呟きでその正体に気付いた。

「たもすけさん……？」

なるほど呼び名かと思ひ至り、訂正する。

「いきなり何だ、福田さん。普段は苗字で呼ぶだろうに」

「え〜？ 何言ってるのよ保助さん。福田さんなんて他人行儀に。」

いつも通り、緑でいいですよ？」

「ん？ いや、だから」

「へえ〜。仲良いんだね、保助さん達。知らなかったなあ」

こちらも普段と違うトーンの低い声で言う林檎に阻まれて、保助はつい言葉をとぎる。してやったりとでも言い出しそうな緑だけが、この状況下で笑顔だった。

「あら？ 知らなかったの藍川ちゃん。私達一応大人なお付き合いをさせていただいているのよ。ねえ？ 保助さん」

確信犯の爆弾投下に、しかし保助は気付かず、応じる。縋るような眼で自分を見る林檎の真意は、彼の性格上分りかねた。

「いや、まあ、多少言い回しに齟齬が生じている気がするが、およそそんな感じではあるな。だが福田さん。俺はあなたを呼び捨てたことなど一度も無いぞ」

言い終えてから林檎の表情の変化に気づき、やはりわけが分からず緑を見るが、こちらはこちらで口元を押さえて笑いを堪えているように、保助は余計に混乱した。

「大川さん、ほんと、凄いですよあなたって。言っというてなんですけど、誤解、解いてあげてくださいね。今私が何言っても聞かなそう。それじゃ」

混乱しっぱなしの保助に、緑はそれだけ言って返答も聞かずに病室を出て行った。どこか一仕事やり遂げたような表情だったのは気のせいだろうと、保助は一人ごちた。もとい、言いきかせた。でなければ、ようやく理解できた現状の創造主に対して文句の一つや二つは言い放ってしまいうだった。意を決してベッドに座っているであろう林檎の方に顔を向けると、案の定、彼女は泣きそうな、それでいて怒り出しそうな、その上笑い出しそうな複雑な表情を浮かべていた。つまりは、困惑だろう。

「えと、えつと……その、あの」

「干支なのか越冬なのか園なのか賀名生なのか」

「どれも無いっ。誤魔化さないでよ。福田さんと、付き合ってる

の？」

「どう答えて欲しいんだ」

「ノー」

間を空けず即答する林檎に、我ながらよく好かれたものだなと苦笑する。尚もどう答えたものかと保助が思案していると、その間を迷いと取ったのか、林檎は勢い込んで声を荒げた。心なしか、頬を赤く染めているようにも見えた。

「だ、だって、保助さん、私のこと、好き、だよな？ うわ、我ながらおこがましい言い草。……それに、それに私、保助さんのこと、その、好きだから……。あの、ええと、うあゝ」

「もういい」

結局言い淀む林檎を一言で制して、保助はため息をつく。思考内容は単純明快、かつ由々しき事態。つまり、だ。

「その通りだ」

と、そういうこと。

*

月日は百代の過客にして、とは言うが、まさにその通りかも知れないと、保助は思った。緑に嵌められて、もとい背を押される形になって保助と林檎は名目上の立場が「恋人」になって以来、赤レンガ造りの病院を白く彩っていた雪も形を潜め、早季節は新春である。眠っている林檎のベッド脇から窓の外を見ると、そろそろ鮮やかな梅の花も咲き始めていた。見える範囲の街並みを見渡して、特別感慨も持たずにまた梅に目をやる。

十数年前に旧横浜の街を襲った大地震によって、街の外観はそれまでとはガラリと雰囲気を変えていた。この病院の位置にも、かつては同じ赤レンガ造りの倉庫が建っていたが、その倉庫とは名ばかりの元観光地も、地震によって全壊していた。そこに何故病院が建ったのかは、無論一市民の保助が知るところではない。

幼かった自分から肉親と住居を奪っていった天災を思い返し、保助は深いため息をついた。確か自分はその頃六歳だったから、林檎はギリギリあの地震には遭ってないのだなと考える。災害の後の街は、今まで見てきたどんな何よりも、彼の頭に根強く張り付いている。結局、あの日の正午から自分の人生は決まっていたのだ。両親が死に、帰る場所も無く、あまつさえ親戚も皆地震で絶えたらしく、身寄りの無い保助は手当たり次第に生き抜く道を選んでいった。荒れたコンビニから食糧を盗み、公園の片隅で夜を越した。思えば、保助が現在泥棒として生きていることすら、奇跡に等しいものなのだ。

「保助さん……？」

と、目を覚ましたらしき林檎から声がかかって、保助は思考を中断した。彼にとつて、もうとうの昔に乗り越えた過去なのだ。今更蒸し返す意味などどこにもない。なので極自然に、保助は林檎に返事を返した。

「おはよう、林檎」

呼びかけただけで、林檎は軽く頬を朱に染める。緑に嵌められたあの日以来、彼女の希望で保助は林檎を名前で呼ぶようになっていたが、希望した本人がまだ呼ばれ馴れていないようだった。

「お、おはよっ」

徐々に会話が弾んでいって、ふと、つい最近林檎の主治医になつたと聞く三輪 尊医師について、林檎が切り出した。

「そういえば、こないだ変わった私の主治医んだけど」

林檎がそう切り出した地点で、保助はこれは愚痴が来るなと悟り、馴れた所作でプラスチックのコップに熱い紅茶を二つ、一方には角砂糖を一つ放り込んでから聞く態勢に入った。無言でコップを受け取った林檎は「熱っ」と呟いて備え付けのトレーにそれを置いてから、改めて切り出す。

林檎の病は完治が極めて困難で、そのせいか担当する医者が次々と変わる。変わる度に何かしらの評価を下すので、その批評が愚痴か

どうかの区別はつくようになっていた。愚痴の場合は、例外なく長引く。

「あいつ、三十過ぎで独身のおっさんだけどさ、診察中に、やたらとベタベタ触ってくんだよね。もう気持ち悪いったら」

「林檎の先入観のせいじゃないのか？」

毎度のことなので、保助も適当に応じた。が、

「こないだなんて胸触られたんだけど？ 直に」

「……顔の特徴を教えてください。それと体格な。身の程を教えてください。とたんに豹変した保助を、林檎は慌てて窘めた。彼が言うからには冗談じゃないだろう。林檎個人としては気を緩ませるとそのまま頼まで緩みそうな言葉だったが、保助にはできる限り犯罪を犯してほしくなかった。泥棒にそんなこと、直接は言わないけれど。」

保助も落ち着き、熱かった紅茶がすっかり冷たくなってきた頃、保助は思い出した風に、尋ねた。

「お前、そろそろ誕生日だろ？ 欲しいものとかあるか？」

「え？ ないない、無いよ。ていうか保助さん、言ったら盗む気でしよう？ あの鈴蘭だってそうだったし」

「そりゃあ、俺は泥棒だ」

「う〜ん……」

どうにも歯切れの悪い林檎に、保助は首を傾げる。

「どうしろって言うんだ？」

「あ、そうだ、保助さんバイトとかしてくれない？ それで、ええと、ティーカップとかプレゼントしてくれたら嬉しいなあ、なんて「泥棒で盗んだ物は汚いから受け取れない、と」

「えー！？ や、そういう意味じゃ……っ！ というか、だったらあの鈴蘭も受け取ってないよっ！！」

「冗談だ」

若干必死になって取り繕う林檎に、保助は吹き出す。約六年、干支の半分ほど年の離れている林檎を、保助は愛おしく思った。彼女は周りの同年代とはまったく違って発する雰囲気違って大人びてい

て、妙齡の保助としては手を出さないように堪えるのも一仕事だった。まったく、可愛い女だった。

「よし、わかった。二週間、バイトして買ってやる」

「ほんと？　ありがとう！」

急に年相応の幼さを伴って笑顔を向けてくる林檎に苦笑しつつ、

「礼は当日までとつとけ」

またお得意のクサイ台詞が出たことは、舞い上がっている林檎には気付かれなかったようだった。

*

「それで、大川さん達の背を押したこの私に、ティーカップのデザインを選んでくれと」

約束の誕生日前日昼。約束通りに日払いのバイトを二週間こなし、約束通りのティーカップを購入するべく、保助は総合病院一階の売店にて緑の助言を授かるため業務中の彼女に声をかけていた。要件を告げると喜々としてエプロンをはずし、「福田抜けまあす」と適当極まりない宣言だけ残して、保助の要望に答えてくれている。からかうような言い草に多少不快を顔に浮かべるが、緑は気にした風も無く相変わらず揶揄するような視線を向けてきた。

「ふふ、バイトねえ。泥棒さんがそこまでするだなんて」

「うるさい」

仏頂面で返しつつ、結局、緑に勧められた、有名なブランドのティーカップを二つと、ついでに切れかかっている茶葉を購入した。

「頑張つて下さいねえ」

尚も笑みを隠さず言う緑に、保助は一言で返した。

「うるさい」

暫くして、保助と緑は病院に戻っていた。別れ際に「今日は後非番なんで」と言つて去ろうとする背を呼びとめ、保助はそういえばと、手に持った紙袋をあさり、手のひら大の小包を緑に投げ渡した。

「？ なんです？ これ」

「今日の礼です。大したものではないが
淡々と言う保助に、緑は笑って言った。

「怒られますよ？ 藍川ちゃんに」

階段を上がって病室に入ると、林檎はベッドにもぐって寝息を立てているようだった。しばし穏やかに上下する肩を眺めて、保助は仕方ないと病室の隅に置いてあるパイプ椅子を持ってきて座った。息をついて、小声でつぶやく。

「折角来たのだが…… 本人が寝ているんじゃない。また日を改めるか。む、一週間後になってしまいか。まあ、問題ないな」
「あるっ！」

「起きているなら最初からちゃんと出迎える」

「う……。催促しちゃったから受け取りづらいんだよ……」

目を逸らして言う林檎に、保助は少し笑いながら、手に持った紙袋を突き出した。

「約束のものだ。受け取れ」

「うわ、なんか良くない取引の現場見たい」

無愛想な保助に苦笑しつつ、林檎は差し出された紙袋を受け取る。中に入った包装紙を取ると、鈴蘭をデザインしたらしき模様のティーカップが姿を見せた。わあ、と、子どもの様にひとしきり目を輝かせてから、今度はその笑顔を保助に向ける。

「ありがとう、保助さんっ」

「いや、約束だからな。気にするな。茶葉も買ってあるんだ、飲むか？」

「うん」

林檎からカップを受け取り、保助は今日店員に聞いたばかりの淹れ方を思い出しつつ紅茶をいれた。何かのハーブを使っているらしいが、詳しい品種等は初心者な保助には全く分からない。購入理由も簡単で、ただ良さそうな香りだったから、だ。

十分に色が出たのを確認して、保助は林檎の目の前のトレーにカップを置いた。すぐ近くに林檎の顔が来て、しかし保助は大人の風格そのままに引き返そうとして。

「……ん？」

唇の塞がる感覚がして、保助は首を傾げた。頬と言わず顔全体を真っ赤に染める林檎を見て、名前の通りだとかどうでもいい感想とともに事実確認をする。なんだ、もう十分大人、か。

「子どもじゃ、無いよ」

「……いいんだな」

「……ん」

一般的な女性のそれよりさらに幾分か華奢な林檎の肩を抱いて、保助はもう一度、今度は彼の方から唇を重ねた。泥棒のくせに期を見誤っていたかな、と、関係ない思考が脳裏に浮かんだ。

体力の低下が原因だったのか、季節の変わり目に林檎は何度か体調を崩した。そのたびに少しやつれた彼女の顔を見る羽目になった保助だが、夏も中盤に差し掛かり、どうにか林檎の体調も落ち着いている。一年で最も虫の喧しいそんな頃、事件は起きた。

*

三階の、変わらぬ病室で、保助は林檎と対峙していた。どう対応したものかと迷い、拳句に何も言えず往生しているだけだが。林檎は、保助が病室に入るよりよほど前から、一人で泣きじゃくっていたようだった。

少ししてようやくなんとか言葉をひねり出し、保助が問う。

「おい、何があった」

声を押し殺していた林檎は、保助の言葉に堰が切れたかのように嗚咽した。何事か、と、保助もまた焦りを覚える。林檎の持病故、いつ余命宣告をされてもおかしくないのだ。こうなっては気が気でないのも仕方のないことである。かといって、このまま黙っていても

栓無き事であるというのも、また事実であった。

「落ち着いたら、話せ」

「……うん」

たつぷり十分ほど泣き続けて、ようやく落ち着いたらしい林檎から聞きだしたことによると、どうやらこういうことらしかった。

林檎の主治医である三輪 尊医師は、彼女の話の話を聞く限りどうにも品の無い医者らしく、常日頃から林檎はこの医師に対して反感を保持していた。

今日この日も、毎日行われる診断で例のごとくセクハラ行為に及んできた三輪を邪険に振り払っていた林檎だったが、彼女の「訴える」という単語に焦燥を感じたのが、三輪はついに暴力をふるってきた。とっさに顔をそむけ、林檎は身をすくめるが、その時手の甲に触れてトレーから落ちた中身の入ったティーポットが、三輪の腕に火傷を負わせたらしい。傷を負って逆上した三輪が、「危険物」と判断してティーポット以下カップ等を一式、全て没収してしまった、と林檎の話の聞き終え、彼女の怒りを宿す目を見、保助はため息を吐いて林檎の頭をかるく叩いた。

「な、なに？」

「俺がなんとかしよう。だから泣くな」

「でも、どうやって？ 皆三輪のロッカーが何かにしまわれちゃったんだよ？」

お決まりのクサイ台詞にはやはり気付かない林檎をしり目に、病室のドアを開けつつ、保助は言う。

「忘れたのか？ 俺は泥棒だ」

*

病院に勤める医者の控室は、一階にある看護師センターの隣に位置していた。看護師センターは受け付けも兼ねており、広いロビーを挟んだ向こうには売店も見える。

見舞客を装って院内の内装の最終確認を進めながら、保助は細く息

を吐いた。もう、この病院に通い出してほとんど半年になる。今更確認の視察など、何の意味も伴わない事に違いなかった。ただ、医者控室や看護師センターに対してはそうではない。何せ、普通に林檎の見舞いでやってくる際、受付の関係で看護師センターには多少目を遣るものの、医者が休憩するだけの控室など、用があるはずも無かったのだ。唯一初めてこの病院に、盗みの目的で夜間立ち入った際には控室への侵入を果たしたが、しかしそれも一度きり、その上保助が通い出してから入ってきた三輪のロッカーなど、当然知る由も無い。大泥棒を自称する保助にとって、状況はどうしたって不利であった。このまま事を行うのは、六年以上にわたってこの業を重ねてきた彼からしてみれば、否、例え新米の盗人であったところで愚の骨頂であるのは火を見るよりも明らかだった。それも、目的が女の為の私物奪還ともなれば尚更である。私情で動くべきではない、稼業ならば、己の生活の経済的利潤のみを追求するべきだと思考の一部が冷静に呼びかけた。考慮の余地も無く正しい意見を却下して、保助は自嘲の笑みを浮かべた。以前の鈴蘭とで、これで二度目だ。全く阿呆になったものだと思いつつも、今更何があったところで、当の林檎本人から制止されたところで、計画を止める気は最早皆無だった。賭けるのはたった一つ、自らの内を占める想いに捨てるのはたった一つ、大泥棒の肩書き。失くしたところで、やることに変わりはない。欲するままに、得るだけだ。

*

真夜中の、時計の針が十二時を示す頃。病院中に響き渡る爆音に、保助は半ば呆然として立ち尽くしていた。何とも悪運の強いことで、目的の物は滞りなく奪還することが出来ていた。戦果も上がり、大成功といって差し支えない結果を報告すべく心なし上機嫌に、しかし決して気を抜くことなく林檎の病室を目指していたところに、急な爆音である。それを発端に無数の警報装置がなり立て、院内には慌ただしい足音が幾つも立ち上ってきた。悪運とは言え、何も

このタイミングで事件なんてと思わず保助は頭を抱えかけ、すぐに大事に気付いて疾走する。鳴っているのは異常を知らせる警報装置だけでは無かった。あの地震の記憶が、鮮明な音に追い立てられるようにして浮かんでくる。中に混じるこの音は、

火災報知機。

耳に張りついて止まないサイレンの幻聴を振り払うようにして、保助は足を進めた。急がねばならない、林檎の無事を、確認しに。持っていたはずのティーカップが手元に無いことに、保助はそこでようやく気がついた。一瞬だけ逡巡し、かぶりを振る。そんなもの、どうとでもなれ。

廊下を覆い始めた煙に焦燥を覚え、殴りつけんばかりの勢いでドアを開けると、病室内に若干入り込んでいるらしい白煙を吸い込み、噎せる林檎の姿が目に入った。大事無い、その事実にあ堵し、すぐさまそばに歩み寄る。背中をさすってやりながら、保助は精一杯に落ちついた声音で声をかけた。

「すまない、ティーカップを取り戻せなかった」

「ん……。いいよ、保助さん。心配して戻ってきてくれたんでしょ？ それより、早く非難しないと」

「ああ。そのタオルで良い、口と鼻とを押さえておけ。……脱出経路を確保する、ちよっと待ってる」

「うん」

言いつけの通り林檎がタオルで口元を防いだのを確認してから、保助は病室の窓を開け放つと、外から聞こえる喧騒を無視して慣れた手つきでカーテンを取り外した。二枚のカーテンを結びつけ、これでは長さが足りないと見るや先程まで林檎が被っていた布団で補強する。微かに漂ってきたシャンプーらしき香りは、だんだんと色濃さを増していく煙にあっさりとかき消された。出来あがった即席のロープをベッドの足に結びつけつつ、言う。

「病院でも、風呂には入れるんだな」

先のシャンプーらしき香りに対しての疑問である。そんな状況で無

いのは勿論のこと百も千も、或いは万にも数段飛ばして恒河沙くらい承知の上なのだが、しかし、一見落ちついた風の保助も、多少なりこの現状に焦りを覚えていないわけでは無かった。そんな、彼にとっては気を紛らわしたい程度の気の無い一言だったのだが、年頃の少女たる林檎にとってはそうそう気軽に口にしたい話題ではなかつたらしく、小さく眉を寄せてから慚然と、口元を押さえるタオル越しに言い放った。

「保助さん、デリカシーだよ、デリカシー。残念なことにお風呂は一週間に一度、それも体調の良い時にしか入れさせてくれないよ。そうでなくなつて汗とか結構気にしてるんだから、その辺分かつて欲しいなあ」

「む。そうなのか、それは、なんだ、軽率だった」

素直に謝罪する保助に「いいよ」と首を振って余裕の態度を見せる林檎だったが、保助の継句には、思わず額の頂点まで、それこそリソゴの様に真っ赤になった。

「すまない。いつもどこか良い匂いがするんでな、その辺りまで考慮できなかった」

「っ、な、何言つてんのさっ！……もう、これだから油断ならないんだよ、保助さんは」

「お前が甘いんだ」

微妙に保助の口元が上がっているのを見て、林檎はもう一度眉を寄せた。途中から明らかに確信犯だったらしい。

余談を終えて、保助は病室のドアの方にちらりと目を遣った。落ちつくには十全な時間だったが、それは勿論のこと火の回る時間もあつたという訳で、薄らと、病室の中にまで、視認できる程度まで増してきた煙が見える。これ以上の猶予はあるまい。

「林檎、体調はどうだ」

「今日はそんな悪くない……。けど、これ以上煙くらつたら良くないかも」

「だろうな。よし、なら、悪いが多少無理をする」

言うや否や、保助は状況が読めずきよんとする林檎に歩み寄ると、有無を言わせず、その細い体軀を片腕で抱き上げた。瞬時に頬を染める彼女の様子に込み上げる笑みを堪え、保助はそのまま、今しがた結びつけた縄に捕まって窓の外へと躍り出る。以前に一度、しかも女性相手に手痛い敗北を喫したとて、保助の運動能力は一般のそれを大きく上回っていた。軽快に壁を蹴って、一気に地面まで降りる。とにかく喧騒から離れよう、そう考え、彼は抱えたままの林檎をそのままに、病院の裏口に走った。

「ああ？ 誰かと思えばいつかの大泥棒……。元気にしてたみたいじゃねえか」

裏口の門に差し当たったところ、まさに今敷地から脱出せんとした手前で、保助の足は自然、棒きれのように動かなくなった。聞き覚えのある声とともに、踏みつけられた即答部の感覚が思い出される。

「あんたは……」

「おう、覚えてたか。そりゃ重畳。見たところ少女誘拐とか、火事場泥棒ってわけじゃあ無さそうだな」

「……何をしているんだ、あんたこそ」

「長年の連れを助けに。関わんなよ、私に勝てないんじゃないやあ、踏み入れた瞬間デッドエンドだ」

「そう、だろうな。……あんたらに関わるつもりは無い。特に今は、こちらにも連れがいてな」

「みてえだな。んじゃ、私は行くよ。そうだ、行くあてねえならあの植物園、使っていないぜ。どうせしばらくはあそこには帰れねえだろうし」

「ああ、ならばそうさせてもらおう」

思っても無い申し出に、自らの悪運の強さを再確認する。「じゃあな」と小さく片手を上げると、彼女は颯爽と、火の手が上がる病院内へと消えて行った。一度だけ病院を見遣り、そして、保助はまた足を動かした。腕の中で林檎の息が荒くなっていることぐらい、彼

はとつくに把握していた。

*

未だ衰えぬ技術で錠を解き、変わり映えの無い園内に立ち入る。事務室を開けると、直ぐに林檎を横たえた。いつの間にか、意識を失くしているようだ。何故か備え付けてあった対毒ガス用としか思えない装置を使って体内に入り込んだ煙を抜く。探しまわるとこれまた何故か出てきた、普段林檎が服用しているのと同じ薬を水で無理矢理流しこむと、ようやく、彼女の息遣いは治まりを見せた。やはりというべきか、ここの持ち主だった彼女らは、裏社会と呼べるそれと繋がっているのかも知れないと、少なくとも戦慄と共に思った。自分が生きている事実が妙に有り難く感じられてくる。殺されても、おかしくは無かったのだろう。

「……………」

緩やかに呼吸を繰り返す林檎に視線を向ける。病院に戻ることは、きつと出来ないだろう。彼女らが関係しているとなれば懸念事項も上がってくるし、そんなことに恋人を預けておく気はさらさら無かった。とはいえ、医療機関に入れなくてはいずれ林檎は死に至るであろうことは、いくら学の無い保助といえど、容易に想像できた。「俺自身も、そろそろ潮時かもしれんな……………」

灯りの無い事務室で、植物の香りに包まれながら、元大泥棒は思う。まずは仕事を探そう。住む場所を見つけよう。出来れば、入院もさせず、林檎と二人で暮らそう。どうせ病院でも常備薬を投与していただいで点滴も無かった。不可能なことでも無いだろう。まっとうに、それこそ幸福に日々を送って。

そうやって、生きよう。

大泥棒のティーカップ事件簿（後書き）

学校行事にてしばし空けてしまいました。こっちも、もっひとつの連載の方も。北海道の空は広がったとです。

今後は二日か三日程に一回更新とする予定です。とはいっても、後二つなのですが。

明けの明星

お盆になると、毎年、田舎のおばあちゃんの家に帰省していた。

父方の祖母で、ふくよかな顔つきの、しっかりと伸びた背が印象深い、優しく良いおばあちゃんだ。私としても、訪ねるとお小遣いまでくれるおばあちゃんに会いに行くのは嫌じゃないし、北の方なのもあって、夏の暑さを避けるにも丁度良い。でも、送り盆の日、顔も知らないおじいちゃんや、曾祖父母の墓参りに行くのは、どことなく違和感があつて嫌いだった。完全な他人の墓に手を合わせているのと、私にとっては、ほとんど変わりなかった。

「ここちゃん、お墓参りに行くのか」

深い皺の刻まれた顔に笑みを添えて、おばあちゃんが言った。おばあちゃんは私のことをここちゃんと呼ぶ。ずっとそうだった所為もあつてか、そこに違和や不快感は無かった。本当は嫌だけど、私は大人しくその言葉に従った。私の中でこれは最早通例行事だし、我儘を言つて、わざわざおばあちゃんを困らせる気も無い。サンダルを履いて、懐中電灯を手に先導するおばあちゃんの後をついて行く。おばあちゃんの後ろに私、その後ろに父と母が並んで、言葉無く夜道を歩いた。

小さな橋を越えて墓地の前に着くと、おばあちゃんは立ち止まって、懐から取り出した虫除けスプレーを私に寄越して来た。受け取つて、むき出しの手足と、それから首回しに吹きかける。冷たい霧がすうと肌に染み込んできて、心地よかった。後ろについていたお母さんにスプレーを手渡して、さっさと墓地に入つて行つてしまったおばあちゃんの後を追う。おばあちゃんの持つ懐中電灯の明かりを頼りにしないと、前方の様子さえ満足に把握できないくらいの、そこは暗闇だった。真っ暗な夜の墓地は、それだけで気味が悪い。幼い頃は、ここに来るだけでべそをかいていたらしかった。湿度の高い、ベタつく風が吹いて、うすら寒い感覚が背筋を撫でた。何度来ても、

本当にぞつとしない。この暗闇も、まごうことなく、墓参りを嫌う要素の一つだった。昼間に来ればいいのにとこぼした事もあるが、おばあちゃんは笑って「少しでも長く、こっちに留まっていって欲しいからね」と言った。それ以上は、何も聞けなかった。

バケツに水を汲んで、私達は親子の姓でもある恵比寿家の墓の前に立つ。柄杓ですくった水を、おばあちゃんは数回、墓石にかけた。ようやく追いついてきたお母さんとお父さんは、おばあちゃんから受け取った柄杓で、隣の、一回り小さな墓に水を浴びせた。それが誰の墓なのか、私は知らない。お母さんはいつもと違う、どこか弱々しい声音で、

「昔はね、難しかったのよ」

とだけ言った。おばあちゃんも、普段気の良いお父さんさえも、妙な表情を浮かべてい

て、私は酷く戸惑った。受け取った数珠を左手に掛けて、ぱつとしない気持ちのまま、手を合わせた。

お参りが終わると、お母さんの雰囲気は幾分か元に戻っていた。渡されていた数珠を返す。

「お墓を出るまで持つてなさい。ついて来ちゃうから」

「ついて来るって、幽霊？」

「そうよ。困るでしょう？」

「いないよ、そんなの」

軽く笑って、私はお母さんの下げていた鞆に、数珠を滑り込ませた。「もう……」だなんて呟いていたけど、お母さんも少し、微笑んでいた。なんとなく、その笑顔に安堵した。

お盆が過ぎると、夏休みはあつという間に終わってしまった。宿題に追い込まれ、なんとか終えて登校した始業式の日は、疲れていたせいも、どこことなく肩が重かった。

何かに憑かれているかのように、重かった。

戸惑う、という言葉の語源を、私は知らない。けれど、今のこの心境を的確に表そうとするならば、それが正に、戸惑うだった。私は戸惑っていた。

「だからつまり、私は幽霊で君は憑かれたって事だよな」

うんうん、と、一人頷く彼女。顔立ちが何処か私に似ているような気がするその人は、自称する通り、というか、まさに、と言うべきか額に逆さのハンペンみたいな三角形を張り付けて、幽霊のような出で立ちだった。いつそ優雅とも表現できる感じで、宙に浮いている。

「んー、あー。まあ、君のおかげってヤツだよな、私にこの顔があるのは。とにかく、当分現世に居させてもらうつもりだから、よろしくベイバー」

びしっと（口で）効果音まで出して、清々しい程に晴れやかな笑顔にウィンク付きで、幽霊は言い放った。言い切った。文字通り、地に足の着いていない台詞だった。

「幽霊つてもっと皆テンション低いのかと思ってました……」

口について出てきたのはそんな台詞で、どうやら、私までふわふわ、思考が正常に働いていないらしい。私のおかげ、という言葉から察するに、相似した顔つきについては、きつと憑依した人間の顔に似るとか、そういった理由なのかもしれない。それにしあって、自分と似た存在と面と向かって話し合うのは、相当な違和感を持たされるものだった。幽霊だなんて言うのだから、尚更。

「どうして、私に憑いたんですか？」

ようやっと、聞きたかったことを口にする。その質問に対する返答は、酷く簡素なものだった。

「お数珠つけて無かったから！」

「……」

お母さんの言葉に従わなかったことをこれほど後悔したことは無いだろう。それにしあって適当極まりないワケもあったものである。妥協して納得、質問を続行する。

「何で今になって出てきたんですか？」

九月十三日。もう、通っている公立中学の新学期が始まって久しぶりだ。丸ひと月ほど、この幽霊は私に潜伏していたことになる。何故、どうして。

「寝過ぎた！！」

大仰に両腕を広げて、彼女は叫んだ。幽霊が寝過ぎしていた。そりゃあ私だってテンプレートな幽霊の存在を信じていたわけじゃないけれど、イメージとか、根こそぎ破壊されていく思いだった。失敗したジエンガみたい。大崩落。

それじゃあ、最後に。

「どうやったたら、成仏するんですか？」

別にこの幽霊に対して、怖いとか嫌いとかかっていう感情があるわけでは無いけれど。でも私には、やらなきゃいけない事があるから。

あまり長居させては上げられない。

「んー、そうだね」

彼女は、一見、というより一聞、感じの悪い質問とも取れるそれを聞いて、しかし、腕を組んで悩んでから、笑顔のままに、こう答えた。

「したいことを終えたら、かな」

*

中学二年生である私が通う中学は、かなり一般的な、良くも悪くも、普通の中学校だった。学問スポーツ共に平均レベルで、よくある話、たまに地方大会か、運が良ければ全国大会に行く程度のスポーツ少年少女が現れ、中には、勿論都会の、すこぶる頭の良い学校へ進学する生徒もいる。そんな中で私はと言えば、運動中の中、勉強の中、顔もスタイルも馬鹿にはされなければ褒められもしない、つとめて平均的な人間だった。あえて言うならば、苗字と、名前が珍しいくらい。名字の恵比寿もさることながら、子を三つ並べた子^{こね}子の名は、全国を探しまわったところで私をおいて他にはいない

だろう。

そう言えば、訪ねたところ、あの幽霊は大和と言っらしい。それが名前なのか苗字なのかは、教えてくれなかった。「幽霊には神秘がつきものだからね。まあ、幽霊自体憑き物なん

だけどつ！ お、私今上手いこと言ったねっ！」というのが理由らしい。後半はただの駄洒落だけど。

ところで、『あの』幽霊という表現には少なからず語弊があつたかもしれない。大和さんたる彼女は、何故なら今も、私以外には視えないというのをいいことに授業中の私の周りを飛び回っているからだ。正直なところ、これはこれで煩わしかった。「授業つまらないねー」だの、「あの教師さ、あれヅラだよヅラ！」だのとはしゃぎ回っているので私にしてみれば授業どころではないものの、ここで下手に声を出して注意しようものならクラス中から奇異の視線をいただくことつけ合いなので、終業して何処か人気のないところに逃げるまでは我慢一択である。自分が可哀想にも思えた。

と、廊下側前方二列目の席から、その一個隣の列の最後列に位置する私の方に向いている視線に気づいた。今年初めて同じクラスになった、中川君だ。噂によると一年生の最初からほとんど不登校の不良生徒だということだけれど、二年生の冬あたりから急に普通に登校するようになったらしく、その、他の男子には無い異常なまでに大人びた雰囲気と体育の授業で露見した運動能力の高さ、顔の良さが作用して、三年生に上がった当初から、女子間での彼の人気は圧倒的だった。

そんな彼が、どうやら間違いない、私の方を見ているようで、噂や恋愛関係に疎い私でも、流石にドキマギせずには居られなかった。何だろう、私何か、変なのかな……？

真っ直ぐ私の目を見つめてくる視線に最早堪え切れなくなった辺りで、救いの音、午前中終業のチャイムが鳴り響いた。大和さんへの文句もある。私はすぐさま席を立ち、昼食の弁当をひつつかんで教室を出た。

*

人気の無いところ、という条件で選んだ先は体育館裏だった。何でも昔から不吉な場所と呼ばれている所為で誰も近づかないらしく、心の底から信じている人なんておよそいないとは思うものの、集団心理は恐ろしいと、そう思わずにはいられない様子だった。ここ何年も、この場所は誰にも手入れされていないのだろう。元は運動部の練習場の一つだったと聞くそこは、長い年月をかけて土を風を持ち去られ、ひび割れた固い地面がむき出しになっていた。ひどい所だと、単純にそう思う。

とは言え、今の私にはこの上なく都合の良い空間でもある。朽ちかけた木のベンチに、強度を確かめてから座る。少し軋んだけれど崩れる様子は無かった。見回しても誰一人いない事に一抹の寂しさを覚えながらも、私は手元の弁当箱の包みを解いた。すべきこと、というより言いたいことはあるが、まずは昼食を終えたい。一人物悲しいグラウンドもどき

で弁当を広げる自分の姿にそこはかとなない哀愁を感じた。

「……さて」

弁当箱を空にして、私はようやく口を開いた。食事中、大和さんとは言えば飽きもせず辺りを飛び回っていて、私が立ちあがった今はすぐ隣の空間に戻ってきていた。聞いたところによれば、宿主から離れて活動するには限界の距離があるらしく、ずっと私の視界におさまる箇所を転々としていた理由が知れた。幽霊にも、色々制約はあるらしい。と、余談はこのくらいにしておいて。

「大和さん」

「何かな」

「成仏しましょう」

「そうだねえ」

何か裏があるのではと勘繰らずにはいられないくらいにあっさりと、相応の覚悟を持って切り出した話題は締結した。拍子抜けして、思

わず聞き返すが、大和さんは軽い様子で「そうだよ」と頷いた。

「ふふん、浮世離れしているっていうのも幽霊には必要なアイデンティティだよ。何せ死んでるわけだしっ」

得意気に胸を張る大和さんに絶句する。その洒落は、いまいち笑っているのか判断しかねるところだった。まあ、生人より活き活きした死人ではあるけれど。これも、ちよつと笑えない、かな。

「そうだ、それで、どうしたら成仏するんですか？ 確か、したいことを終えたら、って言うてましたよね」

「え、うん、そうだけど。それよりさ、子子子ちゃんは昨今の経済状況についてどう思う？ 円高とか、不況とか」

これ以上無さそうなくらい白々しい話題転換だった。白を塗り重ね過ぎてむしろ歪な存在感を浮き上がらせるくらい。ここまで分かりやすく誤魔化そうとするのは、私を信用してないからなのか、それとも、何か言えない理由でもあるのか。どちらにせよ、本人が言うてくれない以上はどうしようもない話である。さつきはあれほど短絡的だったのに、急に成仏したくない用事でも思い出したのだろうか。

私としてみれば、はつきり言ってしまうと、迷惑千万だった。ただでさえ面倒を抱えた身なのに、幽霊の相手も並行してとなると、少しばかり荷が勝ちすぎるだろう。願わくば、元より抱え込んでいる方の問題を早急に片付けたいのだけれど、一筋縄でいくような事情でないことは、私自身が一番知っていた。

「なあ、恵比寿」

「っ！？ て、え？ 中川、くん？」

急に背中から声がかかって、飛び上がらんばかりに肩が跳ねた。次いで振り返り、声の主の顔を見て更に困惑する。一度に二回も私を驚かした彼は、「悪い、急に声かけて」と不器用に微笑んで、私のすぐ隣の地面に立った。見た感じ、人と話すのが得意ではないようだ。先の授業中のこともあって、どうしてずっと、こっちを見ていたのか。聞きたいことはあるけれど、容易に音に乗せることは叶わ

つていくのを見届けて

から、私も同じ道程を辿って屋内に戻って行った。「ふふふくん？ ああいう子がお好み焼きなんだね、子子ちゃん」とか何とか、下らない駄洒落でもって詮索してくる大和さんは、やっぱり幽霊のイメージとは遠くかけ離れて、突き抜けて明るかった。そのくらい素直に生きられれば、私も、もっと迷わずにいられるのだからうけど。少し羨ましいと思うのも、不謹慎なのかな。

なんて感傷は、教室のドアの付近で駄弁る洋子達にあっさりと碎かれた。人半人分ほどしか隙間の残されていないドアを、クラスの女子の筆頭格、木下 洋子他三人にぶつからないよう身を縮めて通る。少しだけ、一番こちら側にいた子に肩が触れると、これ見よがしに舌打ちが聞こえた。堪えて、教室に入る。自分の席へと足早に向かう途中、「うっざ」とか、そんな言葉が背中を追いかけてきた。腹の底が冷えるような感覚も、頭に血が上る感じも振り切って、私は椅子に座り込んだ。着いてきていた大和さんが「どうしたの？」「と首を傾げたけれど、準備した次の授業のノートの端に『ゴメン』と走り書きすると、それきり何も問うてこなかった。申し訳なさそうに背後に回る大和さんに、少しばかり救われたような気がした。気がするだけだって、わかってるけど。

この年頃特有の縦社会を形成する、洋子を筆頭としたグループと衝突したのは夏休み前、三学期制のこの学校で、期末テストを終えて久しい時期だった。元々は私もそのグループに所属し、今思っても馬鹿らしいとしか言いようのない生活を送っていたけれど、その日ついに、ひねて構えていれば格好良いとでも思ってるんじゃないかと錯覚させるほど悪ぶった洋子達の振る舞いに、私の我慢の限界が訪れた。きっかけは些細なことだったように覚えている。いつも通りに気に入らない教師の陰口をたたいていた時の彼女の台詞が、私にはどうにも看過できなかった。

「どうせあいつの親とかも、キモイ顔してるよねえ。あはは、一族ろーとー、死ねばいいのに」

普段だったら私だって、軽薄に相槌を打っていたらるうに、何故かこの時私の口をついたのは冷めきった、非難の言葉だった。よくは覚えていないけれど、多分、直接関係したわけでもない人達を、何でそんな風に言えるの、とか、そんな感じだったはずだ。自分だって勝手な憶測で陰口に乗っかっていたことに思い至ったのは、すっかり頭の冷えた夏休みになってからだった。

一瞬のうちに場は嫌悪化し、あつという間に私は、クラスで孤立するようになっていた。正直、洋子達と仲直りすることなんて考えてもいなかったけれど、擦れ違う度にこの調子では、いつ爆発するか分かったものでは無かった。

本当言つと、この状況を打開する策は、喧嘩して割とすぐに見つけ出していた。簡単なこ

と。『あの時はゴメンね、なんか気が立つちゃってたんだ』なんて軽い調子に頭を下げれば、あつさりと、またあの輪の中に戻れるだろう。

でも、それで。自分自身すら騙して、それで、私は本当に納得出来るんだらうか。

「いやだな」

かすかに声に出してみる。嫌だ。納得なんて出来るわけが無かった。でも、だから。だったら、私は。

どうすれば、いいんだらう？

*

悶々として授業に集中出来ないままに放課後を迎え、受験生として致命的な現状のため息一つ、椅子を引いて立ち上がり、下校の準備に取り掛かった。幽霊、友人、受験と、三つの問題に苛まれて前後不覚、思考すらも整然としないままに、ほとんど無意識に日常を消費する。こんなことで、一体私はどこに行きつくのだろう。

そんな風に、軽い自己嫌悪に陥っていると、中川くんが私の席へ近づいてくるのが分かった。そうだ、放課後、大和さんの事情の解決

を手伝ってくれるんだっけ。

「恵比寿、例の話」

「あ、うん」

「ここじゃああれだし、移動しよう」

「わかった」

応じて、ドアに向かって所で気付く。まだ教室に残っていたらしい洋子や、他のクラスメイトの奇異の視線が、特に私に突き刺さっていた。不思議な雰囲気があって、あんまり自分から他人に声をかけない中川くんに促されているのだから、当然と言えば当然のこと。そしてこれも当然と言えば当然のこと、中川くんになんか好意を抱く洋子達が、何気ない風を装って、私に声を掛けてきた。

「ミッコ」

子が三つ繋がっていることから生まれた私のあだ名を呼んで、洋子は首を傾げた。気軽に会話を始めたように見えているのは、きつと事情を知らない一部のクラスメイトだけだろう。教室に居るほとんどの人が、洋子の意図に気付いて話し声のトーンを下げていた。

「どうしたの？ ていうか、あんたって中川と仲良かったっけ？

何かあったわけ？」

これは詰問だ。多分私に、黙秘権など用意されていないだろう。焦燥を悟られないように

必死で考え込み、最適な答えを探す。直ぐに業を煮やしたのか、昼休みにも洋子と話し込んでいた江藤さん（通称エトちゃん。今となつては、そんな親しげな呼称を使うことはできないけど）が寄ってきて、洋子にかぶせるように口を開いた。

「なにになに？ どしたのミッコ」

「え、や、その」

執拗な追及に、不覚にも口籠る。その隙を、彼女らが見逃してくれるはずもなかった。

「なんなの？ 何か、黙つときたい関係でもあるわけ？」

「そういう、わけじゃ」

「じゃあ」

追い詰められた。洋子が口を開き、トドメの問いかけを発する。その寸前に、

「幽霊」

さらに上から被せるようにして、中川くんの声が響いた。「は？」と、洋子達が目を丸くする。きつと、私も同じような表情をしているのだろう。背中から、大和さんの感嘆が届いた。「ふうん？」面白そうに、展開を見守っているらしい。

「幽霊、視えるんだよ、俺。で、恵比寿が何かに憑かれてるのに気付いたから、除霊してやろうと思つてさ」

努めて真面目な面持ちで、中川くんは語つた。どうしようもなく真実で、私はつい後ろの大和さんに目を遣るが、中川くんの話の聞いたクラスメイト達は、あまりに荒唐無稽な彼の台詞に呆然としているようだった。

「ほら、行こうぜ」

中川くんに手を引かれて、訳が分からない内に、私は連れられるまま教室を出た。

ようやく事態を理解して落ちついたのは、例のグラウンドもどきに辿りついてからだつた。張りつめた空気から逃れて緊張感から解放された所為か、膝から力が抜けて、へたり込む様に昼間と同じベソチに座る。引かれていた手は、靴に履き替える際に解けていた。「ありがとう、中川くん。助かつた」

ようやくとお礼の言葉を絞り出すと、中川くんは「いいよ」と笑つて後ろ髪を搔いた。気恥かしいのかなと思うと、少し可笑しくなってくる。でも、言うべきはお礼だけじゃ無かつた。

「ごめん」

呟くと、声がかすれた。はっとして顔を上げた中川くんが訝しんだ表情をする。

「ごめんって、何が」

心底分かっていないといった表情だつた。堪え切れずに俯いて、か

すれたままの声で続ける。

「あんなこと、言わせちゃったから」

「……ああ」

それだけで、彼は何とか理解してくれたようだ。今度は困った様に、また後ろ髪を搔く。

幽霊の存在を紛うこと無く信じ、あまつさえクラスメイトの女子に取り憑いているそれを除去する。そんな、当事者以外からすれば虚言妄言世迷い言としか捉えようのない旨の言葉を、堂々と、大真面目に、中川くんは言つてのけたのだ。間違いなく、変人扱いは免れないだろうと思う。黙つていれば私の被害が増加すると知つていたから、彼はきつと。やり切れない想いが、私の胸中を渦巻いた。

「私としてはさあ、んなことよか、除霊されるって言い方が気に入らないぜーミドルリバッチ」

「あ。いや、あれは方言と言つか……」

大和さんの陽気な声が響いて、重く沈んだ空気が少しだけ浮いたような気がした。

慌てて取り成す中川くんの表情からも暗さが幾分か除かれて見えて、まったく、どこまでも幽霊らしからぬ人だ。生前は朗らかで人当たりの良い、きつと、人気者だったのだろうと、本心からそう思う。

「生きてる時に、大和さんに会いたかったな、私」

「……にはは、無理だよ、それは」

今度は大和さんが困った風に言つた。分かつてますよ、そんなことはと笑つて、中川くんに向きなおる。そう言えば、さっきのミドルリバッチって、中川くんのことか。わかりにくいあだ名もあったものだった。本名より長いし。確か、中川 太陽くん。

「それじゃあ、改めて大和さんに成仏してもらおうと思うんだけど、どうしよっか」

「とにかく大和さんの未練って奴を知らなきゃ始まんないんじゃないか?」

「ん? 未練?」

私の話の中川くんが乗っかって、続けて大和さんの素っ頓狂な声の上乗せされた。

「何か、未練ありますか？ したいことって言ってたから、それだと思っんですけど」

「強いて言うなら少しでも生きてみたかったっていうのはあるけど、でも、あれ？」

「どうしたんです？」

難しい表情で腕を組む大和さんは、しばらく唸った後、はっきりと断定した。

「未練なんて無いよ？」

*

途方に暮れる私達に、大和さんは極めて軽い調子で「まあ、中川くんもいるし、その内

スツといなくなると思うよ」だなんて言うので、仕方無しに会合は中止、あまり帰りが遅いと夕飯が間に合わなくなるという中川くと別れて、私も帰路についた。

「ほへー。ミドルリバッチは料理出来ちゃうんだね」

「うん、父子家庭で、お父さんが忙しいんだって」

「あの人格には相応の理由があったわけだね。因果鳳凰ってやつだ」
「応報です」

「ヨーホー？」

「前世は海賊だったんですか」

「んー、んー。ヨーホー？」

「暗黒面？」

「違った、ハイホーだ」

「小人……。これ以上はアウトですからね」

「大丈夫、このお話はフィクションでしたっ！」

「なんせ幽霊ですからね」

「中々辛辣な存在否定っ!？」

無駄話を交わしている間に、自宅の屋根が見えてきた。今日のひと幕を思い返し、堪え損ねたため息が漏れる。明日の心配が、懸念で済めばいいと、本気でそう願った。

*

懸念どころか、どんぴしゃで大当たりに最悪だった。自分の席へと向かいながら、沸々と沸いてくる怒りの感情を、拳を固く握ることで抑制する。火を見るより明らかに、非を認めぬより容易く、その惨状は見てとれた。

これが昨日まで自分の座っていた椅子かと、教科書を広げていた机かと思う。

椅子の上には、濡れ雑巾が我が物顔で鎮座していた。机の上には、品の無い悪口がでかでかと存在を主張していた。教師が来るまでに私が対処し得る量を考えている辺り、清々しいほどに外道だ。ちらりと洋子達に視線を遣ると、心底こちらを侮蔑しきった、嫌らしい笑みを浮かべている彼女らが映った。勝ち誇った表情から目を逸らして、片付けを始める。雑巾で落書きを拭いて、上からハンカチで水気を取った。流し台で雑巾を洗いながら、原因を考える。十中八九、昨日の妬み嫉みを含んだ日ごろの鬱憤晴らしたろう。

嫌がらせの内容に、思うところは一つも無かった。幼稚な手段には、どんな対処も意味を成さないから。ただ、クラスメイトから、こんなどうしようもない悪意を形として知らさ

れたことに、怒りではなく、悲しみの感情が湧いてきた。何処で間違ったんだらう。何を

間違えたんだらう。教室に戻ると、さっきはいなかった中川くんが、状況を知ったのか、

ひどく白けた表情で本と向かい合っていた。彼の方は直接被害を受けていないらしい。よかった。小さく安堵して、ようやくそとで、違和感に気付く。

「うつ……く、ひう……」

そっか。

私に憑いた理由も。妙にかまってきた理由も。さっきの涙も、全部わたしを心配してくれた、大和さんの精一杯だったんだ。

「ありがとう、お姉、ちゃん……」

溢れる涙でぼやける目元をぬぐって、前を見据える。不思議と、涙は直ぐに止まった。もう泣かないようにと、連れて行ってくれたのかも知れないと思った。分かってるよ。頑張るから、私。目を逸らした振りをして逃げたりなんて、もうしないから。

大和さんの

お姉ちゃんの姿は、もう無かった。

*

「あんたたち、出来てるんじゃないの？」

彼女が消え去った後も、無粋な問い質しは終わらなかつた。止まっていた時など無かつたかのように、ウソみたいに、日常は過ぎていく。確かにここにいた、お姉ちゃん存在を、世界中が否定しているような錯覚を覚えた。相も変わらず、状況が改善したりなんかは、しない。

でも、横道にそれるのは、もうやめにした。

「関係無いよ、洋子達には。私もう、あなた達と話したくない。陰口も、下らない悪戯も、これ以上、したくないもん」

洋子の目が細められたのは、誰の目にも明らかだっただろう。空気を察したクラスメイトが、不用意に音をたてないようにと息を潜めている。

「はあ？ 何それ。そうやって良い子ちゃんぶって、中川の氣い引こうって？ キモイよ、アンタ」

そんなつもりはない。はつきりと断言しようとした言葉は、肩に置かれた腕に驚いて中断された。

「子子はそんな下らない奴じゃないよ。それに、俺の氣を引くって言うなら、もうとっくに、だし」

「え？」

ふつと唇の塞がる感覚がして、全身が硬直した。教室全体から、どよめきが起こる。

「行こうぜ」

手を引かれるままに、教室を出る。去り際に聞こえた「何それ、キモっ」なんて声は、ちっとも気にならなかった。気にする余裕だつて、無かつたけど。

例によってグラウンドもどきに出ると、即座に頭を下げられた。

「ごめん、勢い余った」

「え、いや、その」

狼狽しきつた脳は、中々整った文章を作り上げてはくれず、意味の通らない、どもつた声がついて来る。だって、さっきのは、やつぱり……。その先の単語を思い浮かべることが本能が拒み、何時までも頭を上げない中川くんさらに混乱する。

駄目だ、こんなんじゃ。しっかり生きるって、決めたばつかなのに。意を決して顔を上げ、声を絞り出す。

「大丈夫だよ」

我ながら落ち着きのない声音だったが、それでやっと、中川くんは顔を上げてくれた。安堵したようにため息をつく。

「はは……」

「あはは……」

お互いに気まずく笑いあい、なんとなく、無言。しばらく黙っていると、やがて中川くんが、何気ない様子で言ってきた。

「なあ、子子子」

「な、なに？」

名前で呼ばれて、一瞬反応がつかまる。そういえば、さっきも子子子って呼ばれていたことを思い出す。悪い気は、するわけ無かつた。

「大和さんのお墓って、何処にあんの？」

「え？……一応、北の方。新幹線で一時間くらい、かな」

「そっか。よし、じゃあ、冬休みにでも、行こうぜ」

「へ？」

唐突な提案に、思わず聞き返してしまう。でも、なるほど、それはとてもいい考えに思えた。

「でも、いいの？ 付き合ってもらっちゃって」

「構わないよ。受験勉強の息抜きも兼ねて。友達の家で勉強合宿とでも言えば、多分誤魔化せるだろうしさ」

まさか幽霊に会ったなんて言えないもんなと、笑う。そうだね、と頷いて、一緒に笑った。冬が少しだけ、待ち遠しくなった。

*

吐いた息が白く染まって、空気に溶け込んでいく。昼過ぎとはいえ、やっぱり冬だ。マフラーの位置を整えて、携帯電話に目を落とすところまで待っていた声がかかった。

「よう、子子子」

「こんにちは、中川くん」

挨拶を交わして、振り向く。コートを着込んだ彼は、相変わらず、大人びた雰囲気をもっている。行こうかと促して駅へと向かおうとすると、「ちょっと待って」という中川くんの声に制止された。

「寄っていききたいところがあるんだけど、良いかな」

一も二も無く頷いて、中川くん案内されるままに道を歩いていた。

着いた先は植物園だった。長い間開かれていないのか、どこか寂れた雰囲気を醸し出している。勝手知ったる様子で、そんな植物園の裏口のドアノブを、中川くんは捻った。鍵はかかっているようだが、きいと軋んだ音を立てて、ドアが開く。手招きされて後に続く。草木の匂いが、鼻孔をくすぐった。展示に違いないだろう花を無遠慮に摘み取って、中川くんはよしと立ちあがった。

「手間取らせた。行こうか」

「うん」

「ちょっと待てよ泥棒少年」

「おわ！？ 何だ、姉ちゃんかよ。戻ってきてたんだ」

「ついこないただけだな」

急に事務室らしき方向から現れた女の人が、立ち去ろうとした中川くんを呼びとめた。少し驚いていた風だけど、話を聞いた限りだと彼のお姉ちゃんらしい。中川くんにも、お姉ちゃんがいるんだ。

「そつちのは？ 今度こそ彼女か？」

「んー、まあ、みたいなもん」

「へえ、ちいと見ねえ間に小生意気になったもんじゃねえか」

彼女扱いされて、見るまでもなく、私の頬は染まっていたことだろう。気付かない振りをして、お姉さんに会釈する。

「んじゃ、行くわ」

「おう、何時でも来いよ」

最後にもう一度会釈して、私達は今度こそ植物園を後にした。いざ、お墓参りだ。

*

お盆と違って、この季節のお墓は閑散としていた。既に太陽は半分ほど顔を隠し、小振りな墓石を赤く染めていた。きっと、私と中川くんの顔も一緒に。

柄杓で水をかけて、持ってきた花を花瓶に挿す。数日前におばあちゃんが出来ていたらしく、花はまだ新しいものだった。

「上手くやれてるから、心配しないでね、お姉ちゃん」

中川くんもいてくれるし、とは、心の中だけでつけ足す。きっとお姉ちゃんには届いているだろう。

「そろそろ帰ろうか」

宵の明星が空に光る頃に、中川くんが言った。頷いて、墓の前から立ち上がる。

「お墓参りですか？ 御二人さん」

星に負けない明るい声が、耳に響いた。自然と、笑みがこぼれる。

「お墓参りですよ、大和さん」

「……そっか」

「そっだよ」

背を向けていたお墓にもう一度向き直って、溢れた笑みを、交わす。

「ひっさー、子子子ちゃん。元気してたかい？」

「久しぶり、お姉ちゃん。そっちこそ、元気だった？」

幽霊に聞く質問じゃないよー。おどけた風に、お姉ちゃんは言う。

「ま、ちょーちょーにこやかハッピーだけどねっ！」

冷たいはずの幽霊の、お姉ちゃんの体は、抱きしめてみると、とても温かった。

私もだよ、と、返した。

明けの明星（後書き）

表題作、つまり、これがメインにして最後の話です。この後にもう一つ、まとめと言っべき超短編が入り、「明けの明星」は終了となります。ここまでお付き合ひ頂いた方、本当にありがとうございます。少しでも、僕の伝えたい事が届いていればと思います。

なお、この作品は高校生たる僕が文化祭出展用に書き下ろしたものです。拙作でろくな校正もしておりませんが、楽しんでいただけただけのならば幸いです。

では、ありがとうございました。また別の作品で出会える事があれば、その時はよろしく願います。

散歩道

*
初夏。陽だまりの中を、ぼくは歩いていた。大好きになった向日葵のそばで、ぼくは眠った。

*
暑くなってきた。植物にはすごしにくい季節だけど、ぼくの気分は上々だった。夏の暑さは嫌いじゃない。

ある夜に、彼女達はいなくなった。その代わりに、少しの間、大泥棒さんと女の子が、ここで過ごして行った。数日たって、またぼくは独り、向日葵と一緒に眠った。

*
また、肌寒い季節がめぐってきた。冬になると、ぼくの毛皮は一層暑くなる。やっと返ってきた彼女たちは、僕の頭を適当に撫でた。

*
懐かしい顔が向日葵の傍に会った。彼女は、ぼくの姿を見て笑った。すぐ後に、番人だった彼と、知らない女の子がやってきた。

*
「この季節はいいですね、寒いけど、日差しがとつても柔らかいです」
その通りだと、ぼくは思った。優しい手に撫でられながら、向日葵の傍で、ぼくは眠った。

ぼくはこの世界が、大好きだ。

散歩道（後書き）

閲覧ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0662o/>

明けの明星

2010年10月11日23時44分発行